

## 7. 陸・淡水産貝類

### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

軟体動物の二枚貝綱及び腹足綱のうち、陸域及び淡水域に生息する種を対象とした。汽水域及び海水域の潮間帯に生息する種のうち、アマオブネガイ科、シラタマアマガイ科、フネアマガイ科、カワザンショウガイ科、トウガタカワニナ科、オカミミガイ科、シジミガイ科はここに含めた。静岡県産の総種数は214種であり、そのうち外来種とされる22種を除き、在来種である192種（腹足綱185種、二枚貝綱7種）を評価対象とした。

対象とした陸・淡水産貝類の生息域は海岸から高山に及び、河川や池の地表の水系のみならず、地下水系からもえられている。陸産貝類は低標高域の多様性が高く、高標高域に生息する種は限られてくる。南アルプスの高山帯から亜高山帯にはナガタネガイが生息する。温帯以下に生息する種は多く、環境の特性に適応した貝類相が成立する。冷温帯の樹林にはヒメギセル、マルクチコギセルなどが生息する。暖温帯の樹林にはヒロクチコギセル、レンズガイなどが生息する。海岸にはヤマトクビキレガイ、ウスコミミガイなどが生息する。湿地にはナタネキバサナギガイなど、河川などの草地にはカタマメマイマイが生息する。河口域にはタケノコカワニナ、ヤマトシジミなどが生息する。河川や池にはマルタニシ、ヒラマキミズマイマイ、マツカサガイなどが生息する。地下水からはカワネミジンツボが採集されている。

石灰岩地には陸産貝類が多産し、時に石灰岩地特有の種が生息する。静岡県で地表の陸産貝類相に影響を及ぼす規模の石灰岩は地質条件から遠州地方に偏在し、牧之原市の女神山のほか、浜名湖北岸から南アルプスの光岳に至るまで小規模な岩体が点在し多様な陸産貝類が生息する。浜名湖北岸の低標高域の石灰岩地には石灰岩地特有の種が分布する。

陸産貝類は移動能力が乏しいと考えられ、各種の分布域は他の分類群と比較して狭い傾向にある。静岡県と隣接する県にのみ生息する種としては、ホウライジギセル、ツバクロイワギセル、メルレンドルフマイマイ、ミカワマイマイなどが知られる。

### (2) 調査の概要

調査はすべての種を対象とし、静岡県下全域で目視による採集のほか、落葉などを篩別した後持ち帰り室内で分離した。水域では主に水網を用いて採集した。すべての分布記録には標本の裏付けがあり、標本は採集者の手元に保存されている。

### (3) レッドリスト種の選定経緯

静岡県レッドデータブック(2004)に掲載された種を中心に、その後公表された環境省レッドリスト(2018)に掲載された種のなかで、静岡県に分布する種を加えて検討した。ただし、絶滅が危惧されるか否かは、静岡県での調査結果で判定した。

### (4) レッドリストの改訂で明らかになったこと

掲載種数は67種で前回の63種より4種増加した。絶滅種は1種、絶滅危惧ⅠA類は7種、同ⅠB類は11種、同Ⅱ類は11種、準絶滅危惧は26種、情報不足が11種であった。静岡県独自の категорияである要注目種に該当する種は判定されていない。環境省レッドリスト(2018)に掲載された種でも、静岡県下では広く分布し、特に減少傾向にあるとは認められない種もある。

### (5) 減少の主要因と脅威

**ア** 各種の開発により生息地の消滅、改変が進むとともに、生息地が分断化している。

**イ** 陸域では、社寺林のような良好な常緑広葉樹林が減少している。残された社寺林でも大径木の枯損や周囲の開発などにより環境が変化している。

**ウ** シカの生息密度の上昇に伴い林床植生の消失や質の低下、土壌の流亡などが起きている。

- エ 石灰岩の採掘や石灰岩地への植林は、かつては重要な減少要因であった。
- オ 島でのみ生息が確認されている種は、生息環境の変化にきわめて弱いことが推測される。
- カ 水域では様々な開発による生息地の消滅、水質悪化が相変わらずある。
- キ 外来種との競合などによる問題が顕在化してきた。タイワンシジミ類など繁殖力の強い移入種による生態系の変化が認められる。
- ク 採集圧の影響は一般に少ないが、頻繁に採集者の訪れる御殿場市のハナコギセルの生息地や、ヤリタナゴの飼育のためのマツカサガイの大量採集は脅威である。

#### (6) 注目される種のカテゴリーと変更理由

カタヤマガイは日本住血吸虫の中間宿主として 1960 年代頃まで積極的に駆除が行われ、一時は絶滅したと見られていた。しかし、静岡県レッドデータブック (2004) の調査で 1 地点が再発見された。そこでは 2010 年頃まで生息が確認できていたが、生息地の水路が暗渠化され、生息可能な環境ではなくなった。周囲の詳細な調査でも生息が確認できず、絶滅と判断した。

絶滅危惧 I A 類としたハナコギセルの基準産地である御殿場市の神社は採集地として有名であり、著名な研究者を中心とした採集会が行われたこともある。神職の話では近年でも個人の採集者が訪れるという。今回、数度の調査でも生息が確認できなかった。そのほかの生息地もきわめて限定され、特定の樹種の限られた木の樹皮に見られるのみであり、生息可能な環境は脆弱と考えられた。

準絶滅危惧と新たに判定したヤマモトゴマオカチグサとマルクチコギセル、サドタカキビ、タンザワキビは 2004 年以降に静岡県で新たに確認された。

#### (7) 考えられる保全対策、今後の留意点

現在、各々の種に対する保護策はとられていないが、貝類の保護には生息環境そのものの保全が不可欠である。そのため、開発や改変に際しては十分な配慮が求められる。山地の天然林、平野部の社寺林など、良好な森林の保全も重要である。近年は、シカの食害による林床植生の衰退と表土の流亡も影響は大きく、県下全域の山間地に対策が求められる。伊豆から県東部地域のヤマメタニシ、ヤセアナナシマイマイ、オオトノサマギセル、ミヤマヒダリマキマイマイなど、そして県中部から西部地域のスジキビ、サドタカキビ、ヤマコウラナメクジなど、冷温帯から暖温帯上部の林床に生息する種の今後の動向を追跡する必要がある。また、採集圧のある場合、その制限や啓発活動が必要である。

#### (8) 文献 (多くの種で参考とした文献)

東 正雄 (1995) 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, 343 pp.

Kato, M., M. Matsumoto & T. Kato (1989) Terrestrial malacofauna of Shizuoka Prefecture in Japan: Biogeography and guild structure. *Contributions from the Biological Laboratory Kyoto University*, 27: 171-215

増田 修・波部忠重 (1989) 静岡県陸淡水産貝類相. 東海大学自然史博物館研究報告, (3): 1-82, col. pls. I ~ III, pls., I - XIV.

奥谷喬司 編著 (2017) 日本近海産貝類図鑑 第 2 版. 東海大学出版部, 秦野, 1382 pp.

湊 宏 (1988) 日本陸産貝類総目録. 日本陸産貝類総目録刊行会, 和歌山, 294 pp.

(松本雅道)

# カタヤマガイ *Oncomelania hupensis nosophora* (Robson, 1915)

(=ミヤイリガイ)

イツマデガイ科 Pomatiopsidae

静岡県カテゴリー 絶滅(EX)変更コード6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧IA類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧I類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

殻高8 mm、殻径3 mmの細長い円錐形をした淡水産の巻き貝。殻は赤褐色で螺層はやや膨らむ。殻口は肥厚し暗色となる。臍孔は狭く開く。風土病として有名な日本住血吸虫症を引き起こす日本住血吸虫の中間宿主である。

## 2. 分布

日本固有亜種で、本州と九州に分布するが、産地は局所的で、利根川下流、富士川中・下流域、広島県、岡山県、筑後川流域に限られる。全国的に生息の減少が著しく、広島県と岡山県、筑後川流域では絶滅した。なお、種としては、国外では中国に分布する。県内では富士川下流域を中心とした富士市や沼津市で古い記録があるが、近年では富士市の住宅地に残された水田の用水路でのみ生息が確認されていた。



富士市産 2001年10月8日 加藤 徹採集

## 3. 生息環境

本来は大河川の荒廃原の湿地に生息していたが、その耕地化に伴い、水田やその周辺の水路を主な生息地としてきたと考えられる。山梨県の生息地では、本来の水田雑草が残る水田やその周辺の用水路で見られるが、冬期にも湿潤な環境がある場所に限られる。

本県では、かつては富士川下流域と浮島沼周辺の湿地や水田、用水路に生息していたが、近年まで確認されていた生息地は、水田と道路に挟まれた小規模な常水のある用水路（U字溝）だけであった。

## 4. 生息状況

1940年代まではまだ浮島沼周辺に広く分布していたが、その頃から一部を除き生息密度はかなり低かった。1950年代になると生息地は急速に失われていき、富士市と沼津市のそれぞれ1ヶ所だけになった。1961年には富士川西岸で生息地が見つかったが、その直後に火炎放射そして殺貝剤（PCP-Na）の大量散布により駆除された。そして、1962年には富士川以東の生息地で本種は確認されなくなった。富士川西岸では2010年頃まで生息が確認されていたが、唯一生息していた用水路が改修、暗渠化され、生息環境が失われた。なお、その後周辺部でも本種の生息は確認できない。

## 5. 減少の主要因と脅威

日本住血吸虫の中間宿主となるため、焼却などの防除が実施されたが、近年は行われていない。そのため、水田の乾田化（15-2）や宅地などへの開発（23）、農薬の影響（32）が大きいと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

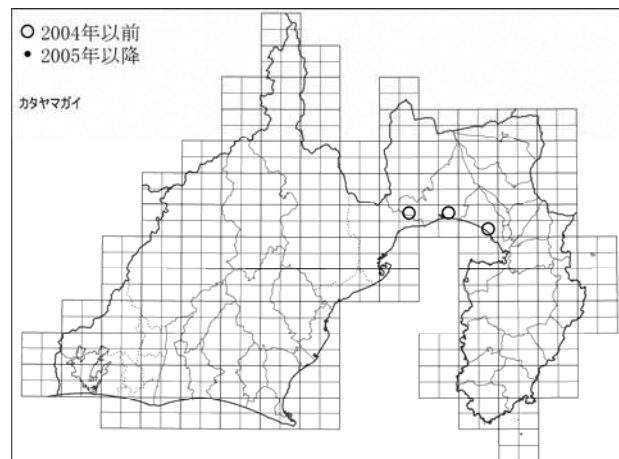
特になし。

## 8. 主な文献

伊藤二郎・野口政輝・望月 久・浅川 豊（1963）静岡県の日本住血吸虫病(4)富士川町におけるNCP-Na散布による宮入貝の撲滅について. 寄生虫学雑誌, 12(1): 88-93

## 9. 標本

富士市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



(加藤 徹)

# タケノコカワニナ *Stenomelania rufescens* (Martens, 1860)

(=レベックカワニナ)

トゲカワニナ科 Thiaridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II類 (VU) ]

## 1. 種の解説

河口付近の汽水域に生息する中型の貝。殻高 60 mm、殻径 20 mm 程度と細高い。殻皮は黒褐色でなめらか。縫合は窪まず、縫合下に細かい螺溝がある。カワニナに似るが、より大型で殻頂に向けて直線的に細くなることで区別できる。また、卵胎生であるカワニナと異なり、本種は卵生で科が異なる。

## 2. 分布

日本固有種で、本州と四国、九州に分布するが、静岡県が分布の東限と考えられる。静岡県では伊豆半島の下田市と松崎町そして富士川河口、浜名湖周辺で確認されている。

## 3. 生息環境

河口域の水底の泥上に生息する。一般には小河川の河口に生息するが、荒廃河川の大川である富士川の河口では、本流ではなく少し離れたワンド状の汽水の池に生息していた。

本種は汽水域の上流寄りに生息するが、純淡水域には生息しない。静岡県の河川は河口域でも比較的勾配が急な河川が多く、本種に適した塩分濃度の範囲は狭く、いずれの生息地でもきわめて狭い範囲にしか生息していない。

## 4. 生息状況

伊豆半島と富士川河口では近年生息が確認されておらず、現在確実な生息地は最近になって生息が確認された浜名湖周辺に限られる。本種は幼生期に浮遊生活をするため、新たな生息地が出現する可能性もあるが、隣県の愛知県(木村, 2009)や岡山県、山口県(福田・木村, 2012)、では絶滅したと考えられており、期待はできない。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口域は人間の経済生活による様々な汚染物質が集まる場所であり、水質の悪化(31)による影響が大きいと考えられる。また、水門や堰などの建設(25)による塩分や底質の変動の影響も考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

福田 宏・木村昭一(2012) タケノコカワニナ. 日本ベントス学会 編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑-海岸ベントスのレッドデータブック, p. 33. 東海大学出版会, 秦野.

木村昭一(2009) タケノコカワニナ. 愛知県環境調査センター 編, レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p. 458. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

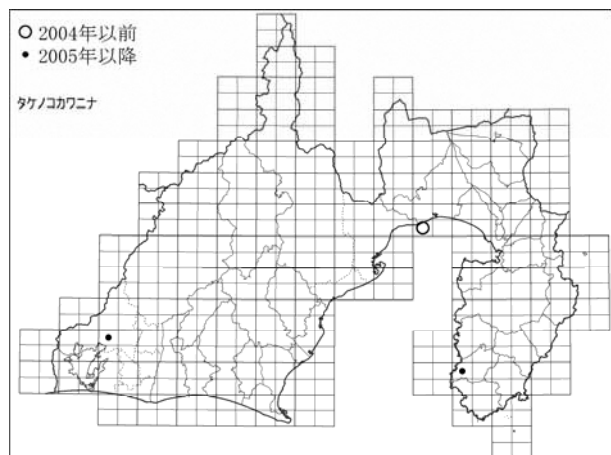
増田 修・内山りゅう(2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

## 9. 標本

富士市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市北区産 2013年11月3日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ヒダリマキモノアラガイ *Calmenella rezvoji* Lindholm, 1927

ヒラマキガイ科 Planorbidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

池沼に生息する淡水貝。殻高6 mm、殻径3.5 mm程度。左巻きで殻は褐色で薄く、表面に毛を伴う螺条がある。体層は著しく膨大し、殻口は全高の3/4を占める。モノアラガイ類に似るが、本種は左巻きである。また、左巻きのサカマキガイとは、螺条の有無で区別できる。

## 2. 分布

日本固有種で、本州の青森県から大阪府にかけて分布する。県内では磐田市の桶ヶ谷沼に唯一の記録がある。

## 3. 生息環境

桶ヶ谷沼は中心部の開水面とその周囲に広がるヨシやマコモなどの湿地に分かれるが、開水面で採集されている。

## 4. 生息状況

個体数はもともと少なかったようで、1970年代でも数個体しか採られていない。その後、1986年に採集されて以来見つかっていない。全国的にも減少が著しく、ほとんどの産地で再発見ができない状況にある。

## 5. 減少の主要因と脅威

桶ヶ谷沼の水源は湧水だけであるが、沼を取り巻く森林のすぐ外側の台地上は農地や工場、宅地と開発が著しく、湧水の水質が悪化し(31)、それが減少の原因と考えられる。

## 6. 保護対策

桶ヶ谷沼は静岡県の自然環境保全地域に指定されているが、本種を保護するような特別な対策は行われていない。

## 7. 特記事項

桶ヶ谷沼は周囲を常緑広葉樹に囲まれた、台地の縁に発達した谷にある沼で、ベッコウトンボをはじめとした希少なトンボが多く生息することで有名である。

## 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

武田由紀夫 (1991) 磐田市桶ヶ谷沼地域の非海産貝類. 遠州の自然, (14): 33-37

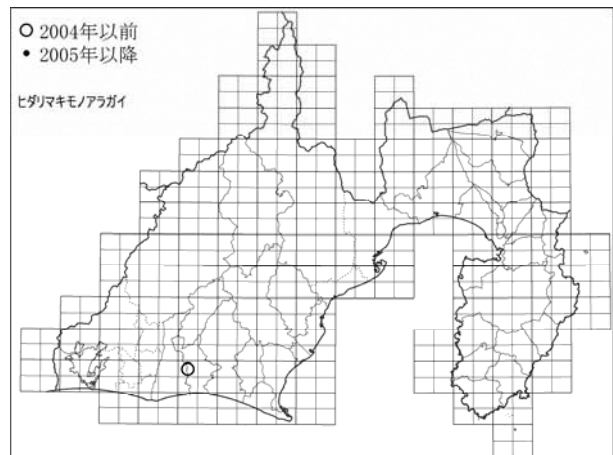
## 9. 標本

桶ヶ谷沼産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



長野県産 2016年11月16日 加藤 徹採集



# ノミガイ *Lamellidea boeningi* (Schmacker & Boettger, 1891)

ノミガイ科 Elasmatinidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類(CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU) ]

## 1. 種の解説

海岸近くに生息する微小な陸貝。殻高4 mm、殻径2 mm。殻は褐色で螺塔は高く円錐形。体層は大きく、周縁は丸い。臍孔は狭く開く。内唇には1本の螺状板がある。

## 2. 分布

国外では台湾に、国内では本州から沖縄にかけて分布する。本州では和歌山県と静岡県にのみ分布するが、生息地はいずれも小さな島嶼である。県内では沼津市のごく小さな一つの島にのみ生息が認められるが、他の生息地と非常に隔離された分布の東・北限である。なお、本種は鳥に食べられても一部は生きのまま排泄されることが知られており (Wada *et al.*, 2012)、県内の生息地も鳥に運ばれたものかもしれない。

## 3. 生息環境

沖縄では海岸近くの広葉樹林下の草や木、石灰岩などの上に生息する。本県ではウバメガシの疎林の林床で落葉下やスゲ類の草などに登って生息している。沼津市の産地では島の一部の斜面でのみ生息が確認された。

## 4. 生息状況

生息する島は1,000 m<sup>2</sup>に満たなく、さらに生息地はその一部に限られるため、総個体数は非常に少ないといえる。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種にとって絶滅が危惧される要因はたくさんある。まず、生息地が分布域の隔離された東・北限に当たり、生息に十分適しているとは考えにくいことである(61)。さらに、生息地がきわめて狭く(71)、また海岸改修などの改変(14)を受けやすいことなどである。これらのことから、些細な環境の変化でも本種を絶滅へ追い込むと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

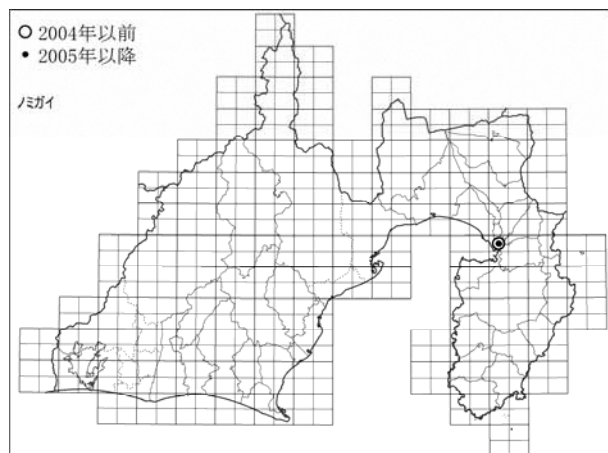
Wada, S., K. Kawakami & S. Chiba (2012) Snails can survive passage through a bird's digestive system. *Journal of Biogeography*, 39: 69-73

## 9. 標本

沼津市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



沼津市産 2012年12月24日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ハナコギセル *Reinia euholostoma* (Pilsbry, 1901)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更コード6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

樹上に生活する小型のキセルガイ。殻高 8 mm、殻径 2.5 mm 程度。体殻は小さく、殻の中層は太い。殻口は大きい。殻表は褐色で、白色の縞模様がしばしば現れる。主壁はごく短く、上腔壁も短い。下腔壁は 2 本ある。月状壁はない。

## 2. 分布

日本固有種で、九州中部と四国南西部に分布し、飛び離れて静岡県周辺にも分布する。本州では静岡県と神奈川県西部に分布し、県内では御殿場市から伊豆半島にかけて生息する。

## 3. 生息環境

暖帯の社寺林などの広葉樹の大径木がある林の特定の木の幹に生息する。静岡県ではタブノキやカキノキに生息するのが確認されている。普段はそれらの木の樹皮の割れ目などに潜んでいる。

## 4. 生息状況

生息地はきわめて限定され、その中でもそれぞれ数本の木に見られるのみであり、個体数はきわめて少ないと判断される。なお、基準産地である御殿場市の生息地では、近年生息が確認されていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

大径木を含む広葉樹林に生息していたが、そのような林は社寺林などを除いてほとんど消滅してしまった。社寺林でも生息するのはきわめて限定され、さらに生息する木も限定される。これらの数少ない木の枯損(54)は本種の産地の消滅につながるおそれがある。また、御殿場市の生息地では多くの採集者が土地所有者に目撃されており、採集圧も大きいと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

キセルガイ科は DNA 解析の結果、属が再編された (Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

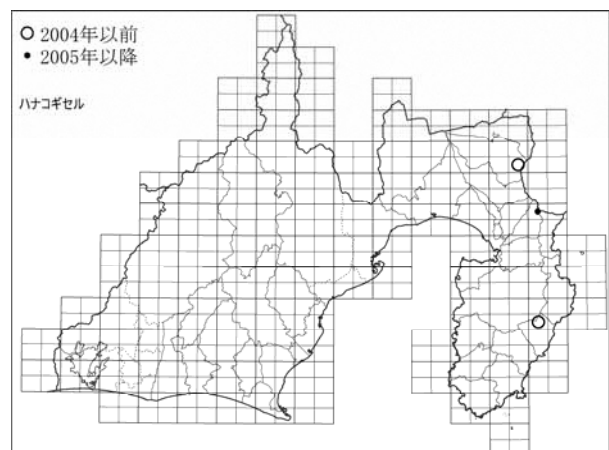
## 9. 標本

函南町産：個人所蔵、御殿場市産：国立科学博物館所蔵、静岡県産：京都大学総合博物館所蔵（平瀬コレクション）

(加藤 徹)



函南町産 2001年11月5日 加藤 徹採集



# オモイガケナマイマイ *Aegista inexpectata* Kuroda & Minato, 1977

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類(CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I類(CR+EN) ]

## 1. 種の解説

石灰岩地にのみ生息する小型の陸貝。殻は扁平で、特に上面はほとんど平らである。周縁は著しく竜骨状となる。臍孔は大きく開く。殻径は10 mm程度であるが本県の個体群は14 mmとやや大きい。周縁上の毛がないオオケマイマイの幼貝に似るが、本種には殻の上面の周縁内側にごく浅い窪みがあることで区別できる。

## 2. 分布

日本固有種で、群馬県から愛知県にかけての石灰岩地に分布するが、いずれの産地もきわめて局地的である。県内では浜松市の石灰岩地に分布する。今までに知られている県内の産地は2ヶ所でいずれの石灰岩地も規模は大きくない。

## 3. 生息環境

石灰岩の大きな露頭の岩の隙間に生息する。植生が灌木林程度の未発達な場所で、石灰岩が土壤に埋没せず、露出しているような露頭が生息環境であると考えられる。同じ石灰岩地でも生息地はきわめて狭い範囲内に限定される。

## 4. 生息状況

生息地で死殻を得ることはそれほど難しくないが、生貝はなかなか見つからない。これは本種が石灰岩の隙間に生息するために見つけにくいこともあるが、個体数自体も多くはないと考えられる。浜松市の1ヶ所の産地(黒田・湊, 1977)では近年生貝は見つかっていない。もう1ヶ所の産地も周囲はスギの植林地となり生息範囲は数百㎡を超えない。

## 5. 減少の主要因と脅威

石灰岩の採掘(17)によりいくつかの石灰岩地が消失したが、そこに本種が生息していたかは不明である。現在では石灰岩の採掘は限定的で本種の生息の脅威とはなっていない。石灰岩地上の灌木林や広葉樹林への植林(71)もかつては重要な減少要因であったと考えられる。現在では生息地がきわめて狭く、個体数も少ないため存続が危ぶまれる状態である(71)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

基準産地がある愛知県では、県の指定希少野生動物植物種に指定されている。

## 8. 主な文献

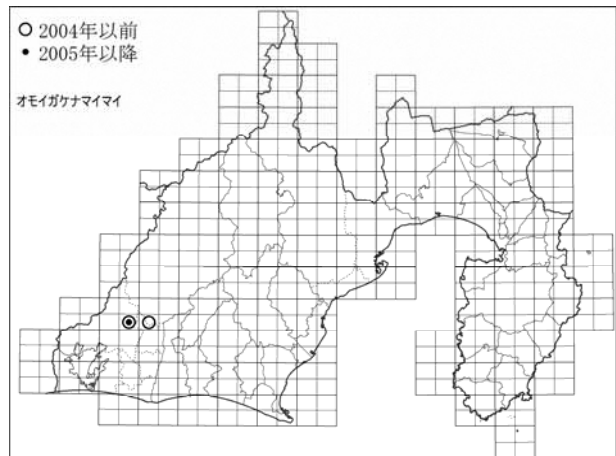
黒田徳米・湊 宏(1977) 愛知県石巻山石灰岩地帯産オモイガケナマイマイ(新種・新称). *Venus*, 36(2): 57-59

## 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市北区産 2003年3月29日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# タメトモマイマイ *Bradybaena phaeogramma* (Ancey, 1883)

(=2004年版のミヤケチャイロマイマイ)

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類(CR) :

環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)(静岡県:該当なし)]

## 1. 種の解説

主に島嶼に生息する中型の陸貝。殻高 19 mm、殻径 26 mm 程度のやや低い円錐形。各層はふくらみ、周縁にはごく弱い角と細い赤褐色の帯がある。殻口は広がり反転する。臍孔は開く。

静岡県の個体群は伊豆諸島の個体群と共通でミヤケチャイロマイマイ (*Phaeohelix miyakejimana*) とされていたが、遺伝子解析や生殖器の形態から奄美諸島に分布するタメトモマイマイや大隅諸島周辺のチャイロマイマイ、八丈島のオナジマイマイモドキと同一種と考えられるようになった (Hirano *et al.*, 2014)。手石島の個体はやや小さく殻高 15 mm、殻径 22 mm。

## 2. 分布

日本固有種で、伊豆大島を除く伊豆諸島と薩南諸島および九州の大隅半島の南端部に分布する。大隅半島南端部をのぞき、生息地は島嶼部に限られる。県内では熱海市沖の初島と伊東市の伊豆半島本土からわずか 700 m ほど沖にある手石島にのみ分布する。

## 3. 生息環境

常緑広葉樹の根元などに生息するほか、手石島では海岸飛沫帯付近の漂着物下などにも見られる。

## 4. 生息状況

初島ではもともと個体数が少なかったが、1989 年 (Kato *et al.*, 1989) 以降生息が確認されない。手石島で本種を見つけることはそれほど困難ではないが、面積がわずか 1.5 ha 程度しかない島なので、全体の個体数はきわめて少ないと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

初島では大型のリゾート開発 (23) が行われたことによる環境の悪化や、島の森林の多くを占めるクロマツ林にスプリンクラーなどで散布された殺虫剤 (32) の影響などが考えられる。手石島は本土から 700 m しか離れていないにしろ、本種が島嶼にしか生息が認められないことから、他種との競争にきわめて弱いことが推測される。したがって、競合する種の侵入は脅威である (56-1)。

## 6. 保護対策

手石島は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、具体的な保護策はとられていない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

Hirano, T., Y. Kameda & S. Chiba (2014) Phylogeny of the land snails *Bradybaena* and *Phaeohelix* (Pulmonata: Bradybaenidae) in Japan. *Journal of Molluscan Studies*, 80: 177-183

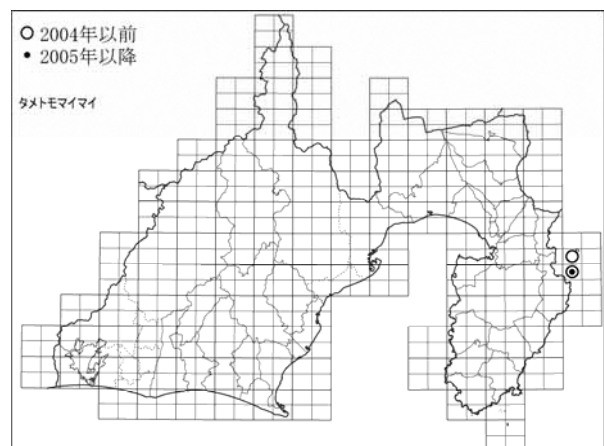
## 9. 標本

伊東市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



伊東市産 2002年5月12日 加藤 徹採集



### 1. 種の解説

小川などに生息する中型の淡水産二枚貝。殻は黒色楕円形で殻長 50 mm 程度。殻のふくらみは弱く、殻表には前半部に粗い顆粒状の模様と後背縁付近に放射肋がある。グロキディウム幼生はオイカワやカワムツなどのコイ科やヨシノボリ類などのハゼ科魚類の鰓や鰭に寄生する。また、本種の外套膜にヤリタナゴが産卵する（ヤリタナゴは本種幼生の寄主にはならない）。

### 2. 分布

日本固有種で、青森県から鹿児島県にかけて分布する。県内では西部の天竜川以西の平野にのみ分布する。

### 3. 生息環境

小川や用水路などの細く緩やかな流れの砂礫底や泥底に生息する。生息地は幼生期の寄主となる魚類の生息が条件である。

### 4. 生息状況

かつては天竜川以西の平地の小川などには広く分布していたと考えられるが、現在でも生息が確認されるのは数ヶ所にすぎない。また、多くの生息地は2面張りの人工的に整備された水路で、個体数は少ない。

### 5. 減少の主要因と脅威

減少は生息地の改変と環境の悪化の影響である。生息地の改変は小川などのコンクリート水路化で、水路底にもコンクリートが張られた場合は、生息は不可能になる(13)。生活排水(31)や各種農薬の流入による水質悪化(32)も個体数の減少に大きな影響を与えている。

また、本種を産卵母貝とするヤリタナゴを飼育する目的で、本種が大量に捕獲されたことがしばしばある(41)。

### 6. 保護対策

ヤリタナゴは静岡県条例で捕獲が禁じられているが、本種の保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

ヤリタナゴの生息地においてその域外繁殖を目的として本種が大量に捕獲された場所では、本種が激減し、その結果ヤリタナゴも激減した。

### 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

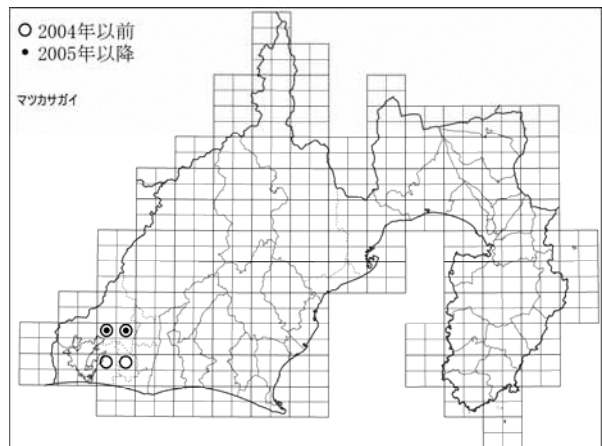
### 9. 標本

浜松市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(加藤 徹)



浜松市北区産 2010年3月4日 加藤 徹採集



# ベニゴマガイ *Diplommatina pudica* Pilsbry, 1902

(=オオヤマベニゴマガイ)

ゴマガイ科 Diplommatinidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

広葉樹林の林床に生息する微小な陸貝。殻高 3 mm、殻径 1.5 mm。殻は淡い赤色で表面に密な肋条がある。螺塔は高い円錐形で体層から次体層にかけてが最も太い。腔襞はない。殻口は丸く縁は大きく広がる。

## 2. 分布

日本固有種。紀伊半島南部と伊豆半島にのみ分布する。伊豆半島でもその分布は局地的で、箱根山系と天城山及びその東麓に限られる。

## 3. 生息環境

落葉広葉樹林または常緑広葉樹林の林床の落ち葉の下に生息するが、天城山東麓では溶岩流跡の転石下に見られる。

## 4. 生息状況

天城山の東麓では個体数が少なくないが、生息地は限定される。天城山の産地では、近年生息が確認できない場所があり、個体数がきわめて少なくなっていると判断される。

## 5. 減少の主要因と脅威

天城山東麓では別荘地など各種の開発 (23) により生息地は減少するとともに分断化している。残った林でも様々な環境の悪化が懸念される。天城山の良好なブナ林でも明らかに個体数は減っているが、天城山では近年、シカの生息密度がきわめて高くなっており、それによる林床の植生の消失や質の低下、土壌の攪乱などの影響 (54) が考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

伊豆半島の個体群は、当初オオヤマベニゴマガイ *D. oyamai* として記載された (波部, 1943) が、現在ではベニゴマガイのシノニムとされている。

## 8. 主な文献

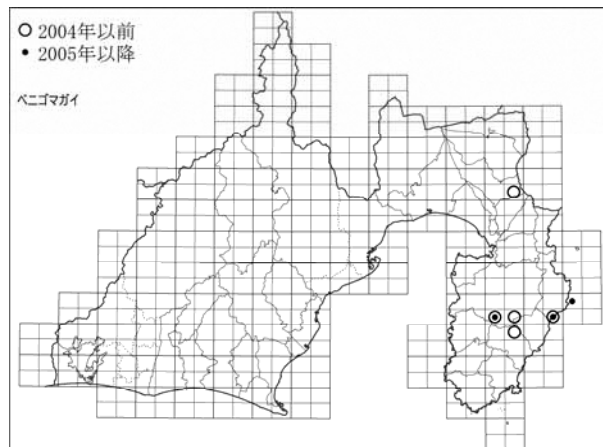
波部忠重 (1943) 日本産陸産貝類の 2 新種 オオヤマベニゴマガイ及びカンダギセル. *Venus*, 13(1-4): 77-80

## 9. 標本

伊東市産ほか: 個人所蔵、伊豆天城山産: 国立科学博物館所蔵



伊東市産 2012年11月25日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# マメタニシ *Parafossarulus monchouricus japonicus* (Pilsbry, 1901)

エゾマメタニシ科 Bithyniidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II類 (VU) ]

## 1. 種の解説

池沼に生息する小型の淡水貝。殻高 13 mm、殻径 7 mm。殻は淡い褐色で顕著な螺肋がある。螺塔は円錐形だが、殻頂はよく侵食される。殻口は厚くなり黒褐色となる。臍孔は閉じる。蓋は卵形で中心がややへこむ。

## 2. 分布

日本固有亜種で、本州と四国、九州に分布する。分布域は広いが産地は局限される。県内では富士宮市の田貫湖にのみ分布する。

## 3. 生息環境

田貫湖の砂底に生息し、湖底に沈んだ枝や葉などを這っているのが観察できる。同所的にヒメタニシとオオタニシ、移入種と考えられるハベカワニナ(北原, 2015)が見られる。

## 4. 生息状況

生息地は田貫湖の 1ヶ所のみで、一部の湖岸でのみ確認された。生息地でも生息密度は低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息地の周囲は開発(23)が進行しており、環境の悪化が懸念される。また、田貫湖には特定外来生物に指定されているブルーギル(52-3)や移入種のハベカワニナの個体数が多く、生態系の変化(71)が激しい。

## 6. 保護対策

生息地は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、保護対策は何もとられていない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

加藤 徹(1998) 静岡県初記録及び新分布の陸・淡水産貝類. 遠州の自然, (21): 15-16

北原佳郎(2015) 静岡県富士宮市の田貫湖で確認されたハベカワニナ. 兵庫陸水生物, 66: 15-18

増田 修・内山りゅう(2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

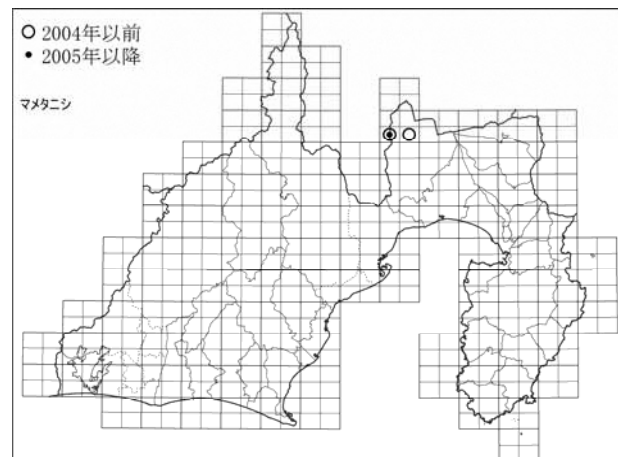
## 9. 標本

富士宮市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



富士宮市産 2015年9月5日 加藤 徹採集



# ヤマメタニシ *Blanfordia integra* Pilsbry, 1924

イツマデガイ科 Pomatiopsidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②) 変更コード 6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する小型の陸貝。殻高 4.5 mm、殻径 3.0 mm の高い円錐形。各層はふくらみ褐色で、口縁は黒ずむ。臍孔は大きく開く。蓋は薄く楕円形で渦巻状の模様がある。

日本海側の個体群と静岡県の個体群は、遺伝的に別種であることが示唆されている (Kameda & Kato, 2011)。

## 2. 分布

日本固有種で、本州に分布する。主に日本海側に分布しており、太平洋側の分布地は静岡県と岐阜県、三重県だけである。県内での分布は伊豆と東部、中部であるが局地的である。いずれも山地で、標高 1,000 m を超える高所に生息地が多い。

## 3. 生息環境

ブナなどのよく残った落葉広葉樹林に分布する。冬期以外はスゲ類などの地表に近い部分の植生上で生活していると考えられる。岐阜県では伊吹山の石灰岩地に産するが、本県では非石灰岩地にのみ分布する。

## 4. 生息状況

現在までに確認された産地は距離的に隔たった4ヶ所のみで、産地は局限される。いずれの産地でも個体数は少ない。小山町の産地以外では、近年生息が確認できない。

## 5. 減少の主要因と脅威

産地はいずれも大径木が残る自然度が高い場所である。このような林はほとんど伐採し尽くされており (11)、産地が失われていったものと思われる。また、本種は林床植生上で生活するが、県内の生息地ではいずれもシカの生息密度が高くなっており、林床植生が失われつつあることの影響が大きい (54) と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

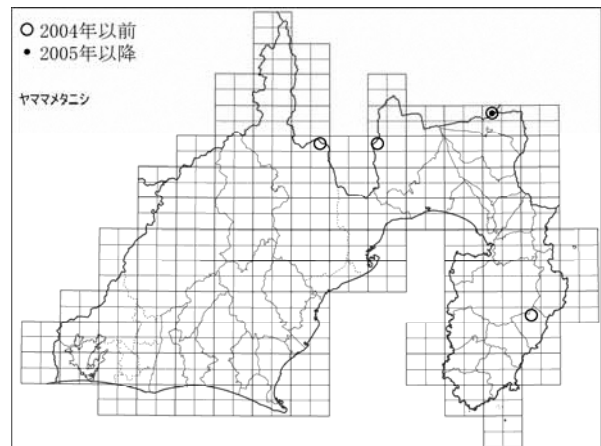
Kameda, Y. & M. Kato (2011) Terrestrial invasion of pomatiopsid gastropods in the heavy-snow region of the Japanese Archipelago. *BMC Evol. Biol.*, 11: 118-131

## 9. 標本

小山町産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



小山町産 2001年9月15日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ナニワクチミゾガイ *Eostrobilops nipponica reikoeae* Matsumura & Minato, 1998

クチミゾガイ科 Strobilopsidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更コード5

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

丘陵地に生息する微小な陸貝で、比較的新しく記載された亜種である。殻高 1.5 mm、殻径 2.5 mm。螺塔は低く、臍孔が大きく開き、一見コハクガイ類に似るが、殻口内にある腔襞により容易に区別がつく。腔襞は体壁板が殻口近くに 2 個、内部奥の殻底に 3 個ある。

## 2. 分布

日本固有亜種で、基準亜種のマツシマクチミゾガイが山形県から長野、新潟県に分布するのに対し、本亜種は神奈川県から大阪府の太平洋側に分布する。いずれの産地もきわめて局地的で、県内においても湖西市の 1 ヶ所だけで生息が確認されているにすぎない。

## 3. 生息環境

生息地は寺院の裏の丘陵地のいわゆる社寺林で、スダジイを中心とした常緑広葉樹の比較的大径木で構成された林である。林床は暗く、山頂近くのため乾燥しており、下層植生は少ないが、そこに堆積した落葉下に生息する。

## 4. 生息状況

生息地がきわめて狭く、個体数がもともと少なかったが、近年生息が確認できていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

大阪府の基準産地の植生はコナラなどの二次林である。また、比較的乾燥した場所を好むようなので、原生的な森林環境に依存する種ではないと考えられる。静岡県の生息地は自然度の高い常緑広葉樹林であり、環境の改変は見られないが、近年生息が確認できない原因は不明である (99)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

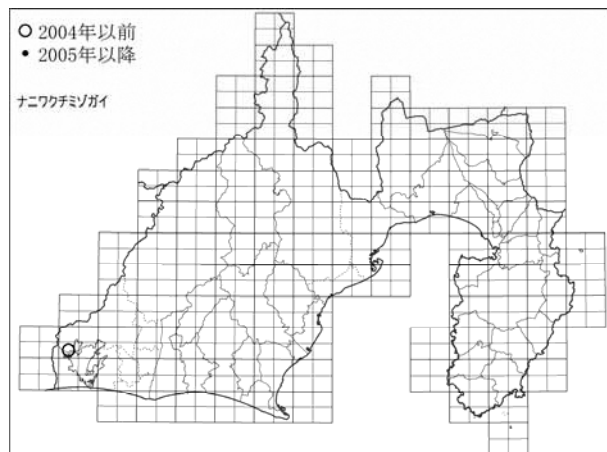
松村 勲・湊 宏 (1998) 大阪府北部で採集されたナニワクチミゾガイ (新亜種) . *Venus*, 57(1) : 39-47

## 9. 標本

湖西市産 : 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



湖西市産 1999年6月13日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ホウライジギセル *Megalophaedusa ikenoi* (Minato, 1980)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する中型のキセルガイ。殻高 15 mm、殻径 3 mm 前後。殻は白色で細かい成長脈があるが老成個体ではなくなる。体殻は比較的太く、最も太い次体層まで徐々に太くなるが全体的に細い。上腔襞は短く、下腔襞より短い。

## 2. 分布

日本固有種で、愛知県東部と静岡県西部にのみ生息する狭分布種。県内では浜松市の主に天竜川水系の山地に分布する。

## 3. 生息環境

主に溪流に沿った広葉樹林に生息する。生息地は礫が堆積した不安定な場所に多く、礫間や落葉下に見いだされる。

## 4. 生息状況

個体数はきわめて少なく、1ヶ所で複数の生貝が得られることは少ない。浜松市天竜区龍山町の産地では、小規模の堰堤が建設された後、生息が確認できなくなった。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布域は全国でも有数の林業地帯で、山林のほとんどがスギ・ヒノキ人工林と化し、しかも手入れ不足の林の増加から、多様な生物が生息する環境ではなくなっている (54)。そのため、生息地は局限され孤立化している。また、谷沿いに生息するため、山地災害やその対策工事 (55) に伴う減少も懸念される。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

キセルガイ科は DNA 解析の結果、属が再編された (Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

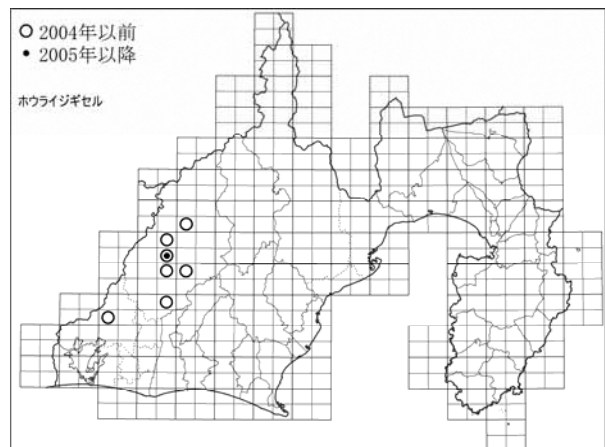
Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

## 9. 標本

浜松市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



浜松市天竜区産 1997年9月19日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# シイボルトコギセル *Reinia sieboldtii* (Pfeiffer, 1846)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類(EN) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

海岸近くの樹上に生息する中型のキセルガイ。殻高 18 mm、殻径 4 mm。殻は顕著な成長脈があり、暗褐色。胎殻は小さく、全高の中心付近で最も太くなる。殻口は卵形で唇縁は白色で大きく外側へ広がる。短い主襞と同じく短い上下腔襞とそれらを結ぶ幅の広い月状襞がある。

## 2. 分布

日本固有種で、本州と四国、九州に分布する。本州での分布は局地的で、日本海側では新潟県と島根県、山口県に分布し、太平洋側では伊豆半島周辺にのみ分布する。県内では熱海市及び東伊豆町、熱海市沖の初島に、そして伊豆半島周辺では神奈川県の実籾町に生息する。

## 3. 生息環境

生息地は海岸近くの社寺林などよく残された常緑広葉樹林に限られる。樹上に生息し、タブ、クスノキ、ツバキ、クロガネモチなどの樹幹部で見つかることが多い。コンクリート建造物の壁などでもしばしば見つかるが、周囲によい広葉樹林のあることが条件である。

## 4. 生息状況

県内の生息地は3ヶ所に限られ、どの生息地も生息範囲はきわめて狭く、個体数も少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

古くは広葉樹林の伐採(11)や開発により生息地が狭められていったと考えられる。また、生息する樹木が限定されるため、近年ではそれらの樹木の枯死や周囲の木の伐採や枯死による環境の変化(54)によっても減少していると考えられる。

## 6. 保護対策

初島以外の産地は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、具体的な保護策はとられていない。

## 7. 特記事項

伊豆半島産の個体群はかつてサキグロシイボルトコギセルという亜種として分けられていたが、他の個体群と区別できないとされる。キセルガイ科はDNA解析の結果、属が再編された(Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

加藤 徹(1998) 静岡県初記録及び新分布の陸・淡水産貝類. 遠州の自然, 21: 15-16

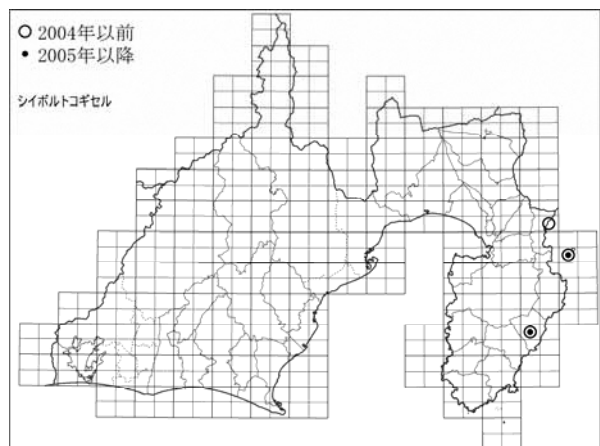
Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

## 9. 標本

熱海市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



東伊豆町産 2000年11月19日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# ヒロクチコギセル *Reinia variegata* (A. Adams, 1868)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更コード 1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

海岸近くの樹上に生息する小型のキセルガイ。殻高9 mm、殻径3 mm。胎殻は小さく体層付近が最も太い。殻は淡い褐色で、不規則に白色の縞模様が現れる。キセルガイ科としては珍しく腔襞はない。殻口は非常に大きく、上板、下板は非常に小さく、奥の方にあり目立たない。

## 2. 分布

日本固有種で、離島（宮城県沖の金華山、伊豆諸島など）をのぞけば関東以西の本州と四国、九州に分布する。本州では主に太平洋側に生息地が点在する。県内では伊豆半島の沼津市から下田市にかけての海岸近くに分布するが、下田市以北の東伊豆地域には分布しない。なお、東伊豆地域の同様な生息環境にはシイボルトコギセルが分布し、混生はしていない。

## 3. 生息環境

海岸近くの社寺林などの常緑広葉樹の大径林に生息する。時にはクロマツが優占する海岸林にも生息することがある。樹上性で、タブ、ヒメユズリハ、クロガネモチなどの幹に着いている。

## 4. 生息状況

個体数の少なくない産地もあるが、産地は局地的で現在は6ヶ所ほどでのみ生息が確認されているにすぎない。また、近年基準産地である西伊豆町田子では生息が確認できず、沼津市では樹木の伐採により生息が確認できなくなった産地もある。

## 5. 減少の主要因と脅威

社寺林のような良好な常緑広葉樹林の減少(54)と、残された社寺林でも周囲の開発(23)などによる環境の変化が主な要因と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

ほとんどの産地は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、具体的な保護策はとられていない。

## 8. 主な文献

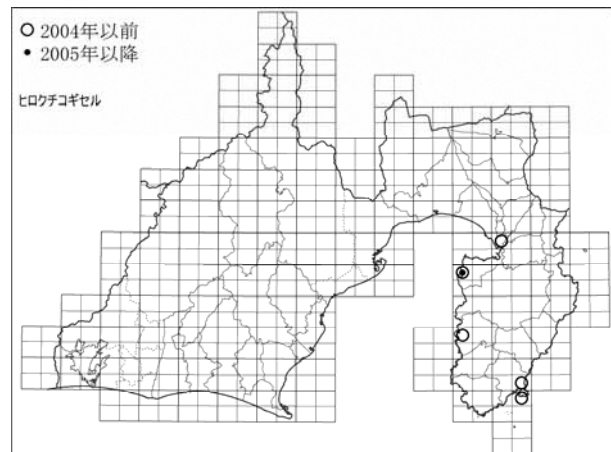
湊 宏 (2002) 金華山の陸産貝類、特にヒロクチコギセルの分布について. ちりぼたん, 32(3): 75-81

## 9. 標本

沼津市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



沼津市産 2000年11月19日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

## レンズガイ *Otesiopsis japonica* (Möller, 1885)

ベッコウマイマイ科 Helicarionidae

静岡県カテゴリ 絶滅危惧 B類(EN)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリ 絶滅危惧 I B類 (EN) : 環境省カテゴリ 絶滅危惧 II類 (VU) ]

### 1. 種の解説

殻高 8 mm、殻径 13 mm の中型の陸貝。殻は薄く半透明な黄褐色で、周縁は著しく角張り、竜骨状となる。県内には似た形態の陸貝はいない。

### 2. 分布

日本固有種で、関東以西の本州から九州にかけて局地的に分布する。県内では東部・伊豆から中部にかけての御殿場市、沼津市、長泉町、静岡市で記録があるが、いずれの産地もきわめて局地的である。

### 3. 生息環境

社寺林などの良好な常緑広葉樹林が残る場所の落葉や倒木の下に生息する。

### 4. 生息状況

各生息地とも個体数はきわめて少なく、死殻を見つけることも困難な状況である。静岡市の複数の産地で、近年生息が確認できていない。

### 5. 減少の主要因と脅威

良好な常緑広葉樹林の減少 (54) や残された社寺林でも周辺の開発 (23) による環境の変化などが影響していると考えられる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

埼玉県では絶滅したという (埼玉県, 2008)。

### 8. 主な文献

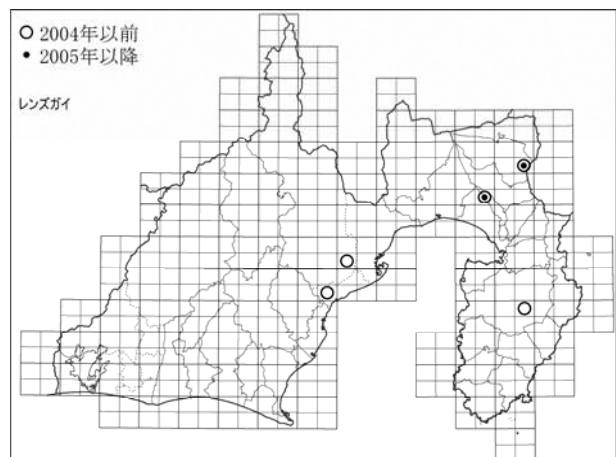
埼玉県 (2008) 埼玉県レッドデータブック 2008 動物編. 埼玉県環境部みどり自然課, さいたま市, 352 pp.

### 9. 標本

御殿場市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



御殿場市産 2016年3月18日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# カタメマイマイ *Lepidopisum conospira* (Pfeiffer, 1851)

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更コード 13

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II類 (VU) ]

## 1. 種の解説

平地や丘陵地に生息する小型の陸貝。殻高 5 mm、殻径 6 mm 程度。螺塔は円錐形で縫合は深く、周縁は丸い。殻は薄い褐色で殻表に鱗片状の殻皮がある。臍孔は小さく開く。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島に、国内では関東以西の本州と四国、九州に分布するが、産地は局地的である。県内では伊豆半島南部の下田市、南伊豆町そして富士市、浜松市で記録がある。

## 3. 生息環境

陸貝としては珍しく、主に草地環境に生息する。そのため人里の周辺や河川敷などにも生息する。伊豆半島では平地の社寺林の林床で確認されていたが、近年富士川と天竜川の河川敷で生息が確認された。

## 4. 生息状況

伊豆半島では近年生息が確認できていない。富士川、天竜川でも個体数は少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の生息地は人里の周辺に多いため、様々な経済活動による生息地の破壊や環境の悪化など (23) が懸念される。河川敷でも毎年増水による個体の流下や生息環境の消失のおそれ (55) があり、また防災工事など (13) による攪乱を受ける不安定な環境下に生息している。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

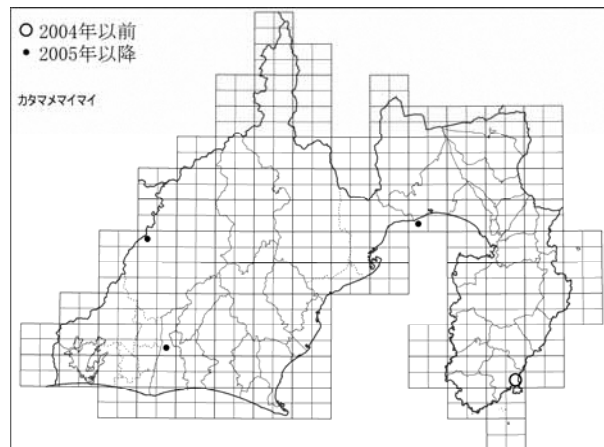
加藤 徹 (2012) 静岡県の各河川で洪水時の漂着物で採集される貝類. 遠州の自然, (35): 15-18

## 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵あり (公的機関の保管不明)



浜松市浜北区産 2011年5月31日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

## 1. 種の解説

殻高 20 mm、殻径 38 mm の大型で左巻きのマイマイ。ミヤマヒダリマキマイマイの石灰岩地性亜種。ミヤマヒダリマキマイマイに比べ大型で螺塔が扁平で周縁角が顕著。また、殻表には色帯がなく成長脈がきわめて粗い。浜松市天竜区などの非石灰岩地に分布するミヤマヒダリマキマイマイも周縁角がやや鋭く本亜種との中間形を呈するが、本亜種と比べ小型である。また、浜松市北区や湖西市の非石灰岩地に生息する個体は大型であるが、周縁角は本亜種と比べ緩く成長脈も粗くなく、別亜種のヒラヒダリマキマイマイの形態を示す。これらの亜種について最近の研究(川瀬ら, 2015)では、ヒラヒダリマキマイマイとミカワマイマイ(特に静岡県のミカワマイマイ)には遺伝的な差があまりないとされる。しかし、石灰岩地に生息する典型的な型は形態的に明らかな区別がつくため、本書ではこの大型で周縁角が顕著で成長脈がきわめて粗い型をミカワマイマイとする。

## 2. 分布

日本固有亜種で、静岡県と愛知県に分布する。県内では浜松市浜北区と北区の石灰岩地に分布する。

## 3. 生息環境

石灰岩地の広葉樹林に生息する。普段は、露出する石灰岩の下や岩の割れ目などに潜っていて、降雨時や夜間にそこから這い出て活動する。

## 4. 生息状況

石灰岩地でも限られた場所のみ生息し、生息地でも生貝を見つけることはきわめて困難である。超塩基性の石灰岩地では、殻が雨水で分解されにくいのが、浜北市の生息地では古い死殻しか最近は見つからず、絶滅したものと考えられる。そのほか、いくつかの生息地で最近では古い死殻しか見つからない。

## 5. 減少の主要因と脅威

元々個体数が少なかった上に、石灰岩の採掘(17)が行われていった。また、生息地はスギ・ヒノキの植林が行われて本亜種が生息できるような良好な石灰岩地は縮小するとともに分断・孤立化し、それぞれの個体群で個体数は危機的に少なくなっている(71)ものと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

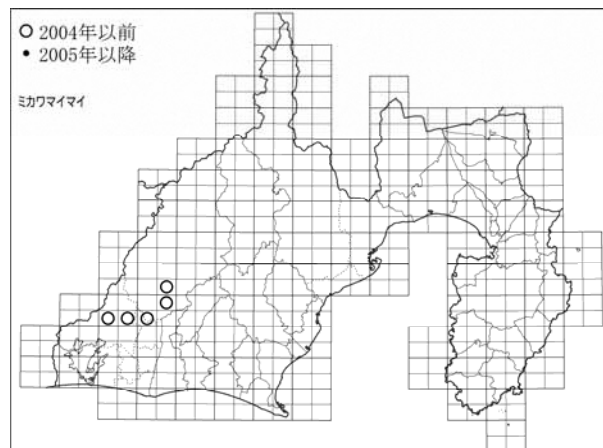
川瀬基弘・西尾和久・森山昭彦・市原 俊・桜井栄一(2015) ミヤマヒダリマキマイマイ(腹足綱: ナンバンマイマイ科) 種内の形態変異と分子系統. *Molluscan Diversity*, 4(1-2): 5-13

## 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市北区産 2003年7月30日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ヤセアナシマイマイ *Satsuma fausta* (Pilsbry, 1902)

ナンバンマイマイ科 Camaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更コード5

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する中型の陸貝。殻高 15 mm、殻径 14 mm 程度で高い円錐形をしている。周縁は丸くそのやや下に赤褐色の細い色帯がある。臍孔は開くが、反転した軸唇に広く覆われる。静岡県産の近縁種ではシメクチマイマイに似るが、本種の方が螺塔が高い。また、ニッポンマイマイは周縁に角があることで区別される。

## 2. 分布

日本固有種で、群馬県南部から静岡県にかけての狭い範囲に分布する。県内では東部から中部と伊豆の山地に分布する。分布の西限は安倍川水系で、南限は伊豆半島である。伊豆半島では主に低山地に生息するが、安倍川水系ではブナ帯に生息し、標高 1,500 m 付近にまで生息する。

## 3. 生息環境

広葉樹林の落葉下や倒木の下などに潜む。比較的湿度のある礫地に多い傾向にある。

## 4. 生息状況

産地は少なくないが、個体数はきわめて少ない。近年は個体数が著しく減少しているようで、見いだすのが困難になった。特に、安倍川水系では近年生息が確認できていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

広葉樹林の減少と森林を取り巻く環境の変化が大きいと考えられる。特に、すべての生息地でシカの生息密度がきわめて高まったことにより、生息環境である林床の植生の消失や攪乱などによる質の低下の影響 (54) が考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

埼玉県では絶滅とされている (埼玉県, 2008)。

## 8. 主な文献

埼玉県 (2008) 埼玉県レッドデータブック 2008 動物編. 埼玉県環境部みどり自然課, さいたま市, 352 pp.

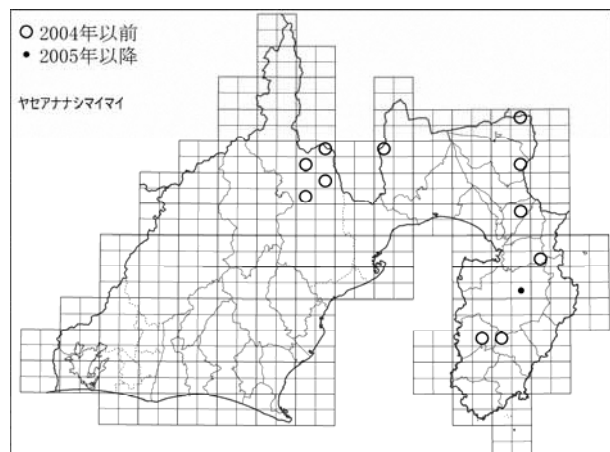
## 9. 標本

静岡市産ほか: 個人所蔵、御殿場市産: 国立科学博物館所蔵

(加藤 徹)



静岡市葵区産 2002年5月19日 加藤 徹採集



### 1. 種の解説

湿地や池沼などに生息する小型の円盤状の淡水貝。殻径 4 mm、殻高 1 mm 前後。殻は褐色半透明で光沢がある。生態的には右巻きのように見えるが、構造的には左巻き。殻表には成長脈がある。螺塔は大きくへこむ。殻底の中心部はやや突出する。ヒラマキガイモドキに似るが、本種はより小型で螺塔部のへこみがより広い。

### 2. 分布

日本固有種で、本州と四国、九州に分布する。県内では西部の浜松市と磐田市の湿地や池沼にのみ分布する。

### 3. 生息環境

県内においては池沼より、開水面がない湿地に多く生息する。池沼でも周辺部の植生が繁茂する環境に生息する。湿地性のスゲ類やイネ科草本などの根際付近や水中の落葉上に見られる。

### 4. 生息状況

各産地とも個体数は多くない。浜松市浜北区の生息地の湿地は埋め立てられた。また、1986 年に見つかった磐田市の桶ヶ谷沼 (武田, 1991) では、当時はふつうに見られたというが、近年は確認できない。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の古い記録はないが、湿地や池沼の開発による生息地の消滅 (12、15-1) が各地であったと考えられ、現在でも消失する生息地がある。また、水質の悪化 (31) や農薬の流入 (32) などの影響も十分考えられる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

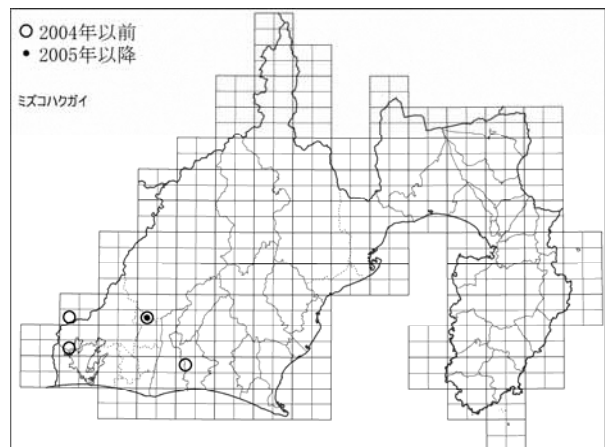
武田由紀夫 (1991) 磐田市桶ヶ谷沼地域の非海産貝類. 遠州の自然, (14): 33-37

### 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



浜松市天竜区産 2002年3月31日加藤 徹採集



(加藤 徹)

# マキシジコミミガイ *Laemodonta manilifera* (H. & A. Adams, 1854)

オカミミガイ科 Ellobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU)(要件-①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

## 1. 種の解説

転石海岸に生息する小型の巻貝。殻高7mm、殻径5mm。殻は厚質で臍孔は閉じる。殻表には18本程度の粗い螺肋があり、黄褐色。内唇に2歯、軸唇に1歯、外唇に2歯を持つ。県内に生息する近似種のウスコミミガイはより大型で螺肋数が多い。また、シユジュコミミガイはより小さく、螺肋の彫刻が薄く殻底近くに縫帯がある。

## 2. 分布

国外では西太平洋からインド洋にかけて、国内では房総半島以南に分布する。県内では伊豆半島にのみ分布する。伊豆半島での分布は局地的で、下田市と伊東市、沼津市で確認されているにすぎない。

## 3. 生息環境

転石海岸の潮間帯上部に生息する。半ば砂に埋もれたような転石下に生息し、ナギサノシタタリやサツマクリイロカワザンショウガイ、ヤマトクビキレガイなどと同所的に見られることが多い。

## 4. 生息状況

清浄な海岸にのみ見られ、ナギサノシタタリなどに比べ産地は非常に少ない。また、いずれの産地でも個体数は多くない。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種が生息する転石海岸は干潟などと比べ開発などによる改変の影響が少ないが、それでも、護岸工事など(14)による影響は少なくないものと思われる。また、本種の生息地はいずれも集落から離れた自然環境の高い清浄な海岸に限られることから、環境汚染(71)に対して敏感であることが推測できる。

## 6. 保護対策

ほとんどの産地は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、具体的な保護策はとられていない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

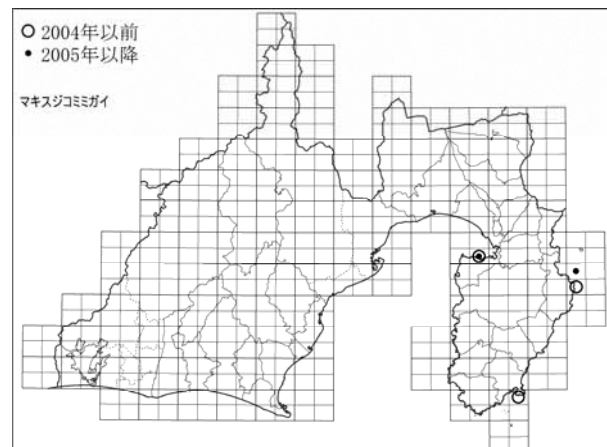
奥谷喬司 編著(2017)日本近海産貝類図鑑 第2版. 東海大学出版部, 秦野, 1382 pp.

## 9. 標本

下田市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



伊東市産 2002年5月12日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

### 1. 種の解説

海岸の飛沫帯の転石下などに生息する小型の貝。殻高 9 mm、殻径 5 mm。薄い褐色で殻表には多数の細かい螺肋がある。内唇に 2 歯と軸唇に 1 歯、外唇に 1 歯がある。県内に産する種としてはマキシジコミミガイやシュジュコミミガイに似ているが本種の方が大きく、螺肋がより細く数が多いことで区別される。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島に、国内では三陸海岸から沖縄にかけて分布する。県内では沼津市と浜名湖のごく一部に分布が確認されているだけである。

### 3. 生息環境

内湾の奥や河口付近の泥に埋もれた石の下などに生息する。浜名湖の生息地は陸側にヨシやウラギクなどが見られる泥底の湖岸に位置する。泥に半ば埋もれた石にはタマキビやカワザンショウガイ、イシマキガイなどが多く見られ、ウスコミミガイはそれらより深い位置に生息し、ヒナユキスズメが同所的に生息する。

### 4. 生息状況

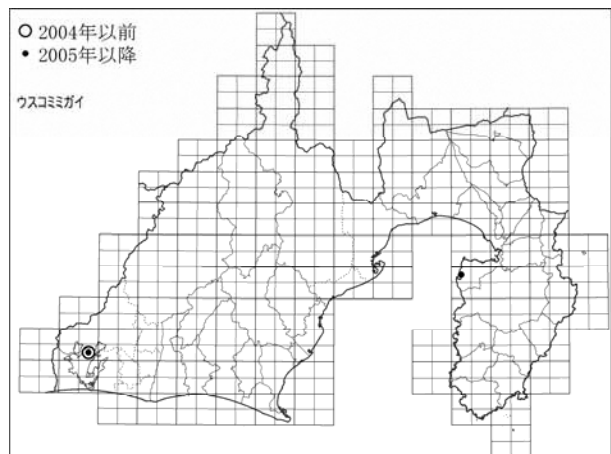
県内では浜名湖のごく一部でのみ生息が確認されていたが、近年沼津市でも生息が確認できた。しかし、いずれも生息範囲は狭く、その個体数もきわめて少ない。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内には生息に適した環境が少なく、もともと個体数は少なかったことが考えられる。それに加え、海岸や河口の開発や護岸工事など (13、14) による生息地の減少、また生活排水の流入による生息環境の悪化



©2019 T.Kato  
浜松市北区産 2000年11月11日 加藤 徹採集



(31) などが減少に拍車をかけているものと思われる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

木村昭一 (2012) ウスコミミガイ. 日本ベントス学会 編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑-海岸ベントスのレッドデータブック, p. 96. 東海大学出版会, 秦野.

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

奥谷喬司 編著 (2017) 日本近海産貝類図鑑 第2版. 東海大学出版部, 秦野, 1382 pp.

### 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



# ナガタネガイ *Columella edentula* (Draparnaud, 1805)

キバサナギガイ科 Vertiginidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)  
(本州以南のナガタネガイ) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する微小な陸貝。静岡県の個体群は殻高2.3 mm、殻径1.2 mm、5層と螺塔が太く低い傾向にあった。殻は黄褐色半透明で薄い。螺層は円くふくれ、体層と同じ高さである。殻口は丸く、同じ科に属する多くの種にある歯が本種にはない。臍孔は開く。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道から本州、四国に分布する。北海道では各地に分布するが、それ以外では産地はきわめて局限され、個体数も少ない。県内では標高2,500 mを超える南アルプスの荒川岳と光岳の2ヶ所で生息が確認されているのみである。

## 3. 生息環境

北海道では各種の立地条件下で生息が認められるが、県内では高山帯の矮性低木の下と亜高山帯の石灰岩の露頭で生息が確認されている。

## 4. 生息状況

荒川岳での生息数はきわめて少ない。光岳は荒川岳より多い個体数が確認されているが、生息地は数百㎡程度しかない。

## 5. 減少の主要因と脅威

光岳の生息地は面積がきわめて狭く、最近では生息地のある石灰岩地まで歩道が延び、近年の登山ブームと相まって人の立ち入りが目立ち(51)、環境の悪化が懸念される。

## 6. 保護対策

光岳の生息地は国の原生自然環境保全地域に指定され、荒川岳の生息地は国立公園の特別保護地区に指定されている。

## 7. 特記事項

光岳の生息地は国の原生自然環境保全地域に指定されているが、人の立ち入りは自由にできる状態となっている。

## 8. 主な文献

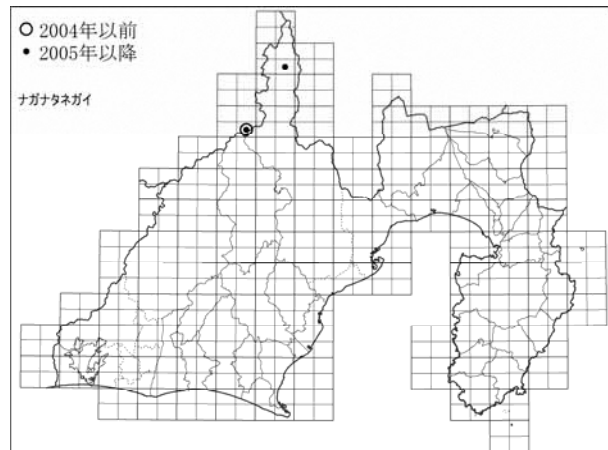
Kato, M., M. Matsumoto & T. Kato (1989) Terrestrial malacofauna of Shizuoka Prefecture in Japan: Biogeography and guild structure. *Contributions from the Biological Laboratory Kyoto University*, 27: 171-215

## 9. 標本

静岡市産：個人所蔵(公的機関の保管不明)



静岡市葵区産 2010年7月25日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# キバサナギガイ *Vertigo hirasei* Pilsbry, 1901

キバサナギガイ科 Vertiginidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU)(要件-①②)変更コード 1,9

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

微小な陸貝で殻高 1.7 mm、殻径 1.0 mm で殻は赤褐色。殻口には内唇と軸唇にそれぞれ 1 個、外唇に 2 個の歯状板がある。近似種にヤマトキバサナギガイがいるが、図鑑の表示に間違いがあったことなどから、両種が入れ替わって認識されることが多かった(福田, 2010; 和田ら, 2015)。また、ヤマトキバサナギガイは殻が太く、殻口の歯状板が大きく、殻が薄い藁色であることなどで区別される。

なお、浜松市北部の石灰岩地には同所的に同属の 2 種が生息し、キバサナギガイとヤマトキバサナギガイとしているが、福田(2010)と和田ら(2015)によるとキバサナギガイは海岸近くのみ生息するとされ、本種の分類学的位置は検討の余地がある。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国に分布する。いずれの産地も局地的で、個体数も少ない。県内では西部の北遠地区の山地にある石灰岩地でのみ確認されている。

## 3. 生息環境

本種は石灰岩地固有種ではないと考えられるが、県内で見つかったのは石灰岩地に限られる。落葉広葉樹の灌木が生える石灰岩地の岩壁や転石下に生息する。周囲の非石灰岩地にも生息の可能性はあるが、まだ見つかっておらず、生息していたとしてもきわめて密度は低いものと考えられる。

## 4. 生息状況

現在生息が確認されているのは浜松市北部の石灰岩の露頭に限られ、個体数は少ない。同所的にナタネガイモドキやヤマトキバサナギガイが生息しているが、本種の個体数が最も少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内で本種が発見されたのは比較的新しく、現在減少しているか否かは不明である。また、生息地の石灰岩の露頭を開発するような動きもない。しかし、生息密度と生息地の面積を考慮したら、本種の存続はきわめて憂慮される状態(71)と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

福田 宏(2010) ヤマトキバサナギ. 岡山県レッドデータブック 2009 動物編, p. 338. 岡山県環境文化 部自然環境課, 岡山.

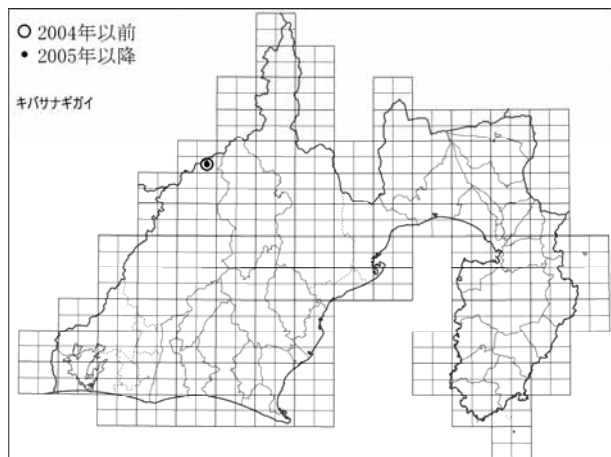
和田太一・川淵千尋・為後智康(2015) 成ヶ島および紀淡海峡の礫浜海岸飛沫帯上部で採集された希少 腹足類 3 種. *Molluscan Diversity*, 4(1-2): 37-49

## 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 T.Kato  
浜松市天竜区産 2015年11月21日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ヤマトキバサナギガイ *Vertigo japonica* Pilsbry & Hirase, 1904

キバサナギガイ科 Vertiginidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する微小な陸貝。殻高 1.5 mm、殻径 1 mm の卵形。殻は薄い藁色で螺層はふくれる。図鑑での表示に間違いがあったことにより、近似種のキバサナギガイと入れ代わって認識されることが多かった(福田, 2010; 和田ら, 2015)。キバサナギガイは殻がより細く、殻口の歯状突起が小さく、殻がより赤みを帯びる。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、九州に分布する。県内では下田市、松崎町、静岡市(2ヶ所)、浜松市(3ヶ所)で確認されている。

## 3. 生息環境

主に山地で見ついているが、下田市では海岸の岩場で確認されている。また、浜松市の3ヶ所は石灰岩地であるが、それ以外は非石灰岩地である。非石灰岩地では岩場や礫地で確認されている。

## 4. 生息状況

いずれの産地でも個体数は少なく、特に非石灰岩地ではきわめて少ない。生息地はそれぞれ環境条件が異なるが、いずれも自然度が高い好条件の場所に限られる。静岡市の産地では、最初の確認の後、再確認ができていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

石灰岩地の産地はきわめて狭い範囲である。また、非石灰岩地の産地は、いずれも岩場や礫地などの不安定な狭い環境にある上に各産地とも個体数が少ないため(71)、それぞれの産地で絶滅の危機にある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

福田 宏 (2010) ヤマトキバサナギ. 岡山県レッドデータブック 2009 動物編, p. 338. 岡山県環境文化 部自然環境課, 岡山.

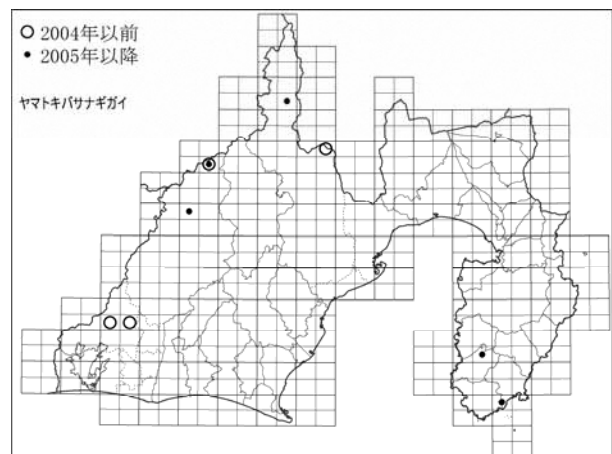
和田太一・川渕千尋・為後智康 (2015) 成ヶ島および紀淡海峡の礫浜海岸飛沫帯上部で採集された希少 腹足類 3 種. *Molluscan Diversity*, 4(1-2): 37-49

## 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 T.Kato  
浜松市天竜区産 2010年2月21日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# オオトノサマガセル *Megalophaedusa rex* (Pilsbry, 1905)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU)(要件-①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT) ]

## 1. 種の解説

殻高 40 mm、殻径 9 mm と大型のキセルガイ。殻は濃い褐色を呈し、軟体も暗褐色である。主襞は短く、上腔襞も短くその下にごく短い腔襞が 5 個程度連なる。胎殻が太いのが特徴で、県内にふつうに生息し本種と大きさが同程度のオオギセルは胎殻が小さいことで区別がつく。

## 2. 分布

日本固有種で、関東西部から静岡県中部にかけて生息する狭分布種。県内では伊豆半島と東部から中部にかけての山地に分布し、大井川流域が分布の西限で伊豆半島が南限となる。

## 3. 生息環境

山地の広葉樹林にのみ生息する。谷に沿った比較的傾斜のある湿った礫地で、しかもカンスゲなどの林床植生が豊富で安定した場所で見つかることが多い。

## 4. 生息状況

もともと個体数が多い種ではなかったが、最近ではどの産地も生息数がきわめて少なく、複数の生具を見つけることは困難な状況である。特に伊豆半島では近年得られることが少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

天然の広葉樹林の伐採(11)と針葉樹の人工造林(71)が生息地の減少の主要因と考えられる。溪流沿いの森林に多かったが、砂防ダムなどによる環境の変化(25)も無視できないと思われる。さらに、伊豆半島では、シカの生息密度がきわめて高く、林床植生の食害や踏み荒らしにより林床環境の質が悪化している(54)ことも原因であると考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

キセルガイ科は DNA 解析の結果、属が再編された (Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

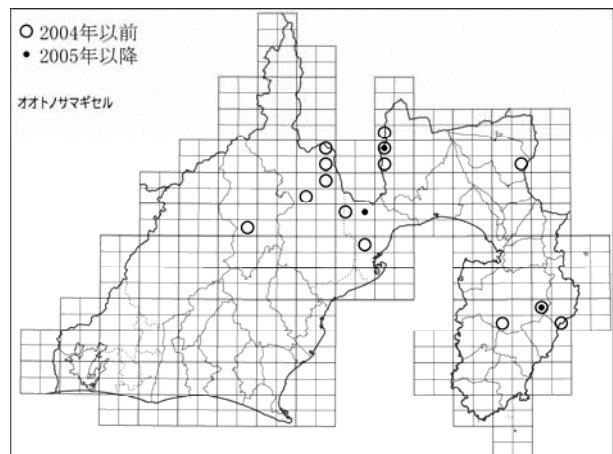
## 9. 標本

富士宮市産ほか：個人所蔵、伊豆天城山産：国立科学博物館所蔵

(加藤 徹)



富士宮市産 1995年5月25日 加藤 徹採集



# ツバクロイワギセル *Megalophaedusa iijimakuniakii* (Minato & Habe, 1983)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-①) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する小型のキセルガイ。殻高 10 mm、殻径 3 mm 程度。殻は白色で表面に細かい成長脈がある。胎殻が大きい。主襞、上腔襞とも短く月状襞も短い。下腔襞はない。

## 2. 分布

日本固有種で、長野県南部と静岡県、山梨県西部にのみ生息する狭分布種である。県内では富士宮市より西の山地に分布する。安倍川水系には比較的多くの産地が分布するが、それ以外の地域ではきわめて局地的に分布する。

## 3. 生息環境

山地の広葉樹林に生息する。カンスゲなどが茂る湿った礫地に生息が確認される場合が多い。産地では礫間の比較的深い場所に生息する。基準産地である長野県大鹿村燕岩などは石灰岩地であるが、県内における産地の多くは非石灰岩地で、浜松市北部の産地だけが石灰岩地である。

## 4. 生息状況

いずれの産地でも個体数は少なく生貝を見いだすのは難しい。特に、安倍川中流域や天守山地の標高が低い場所での生息数は近年きわめて少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

スギ・ヒノキの人工林化 (71) や開発 (23) などによる広葉樹林の減少が主要因であると考えられる。もともと個体数が少ない上、生息環境はかなり限定されるため、環境の変化には弱い種であると考えられる。このため、近くに道ができたなどという一見些細な変化 (24) でも本種は重大な影響を受けるものと思われる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

キセルガイ科は DNA 解析の結果、属が再編された (Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

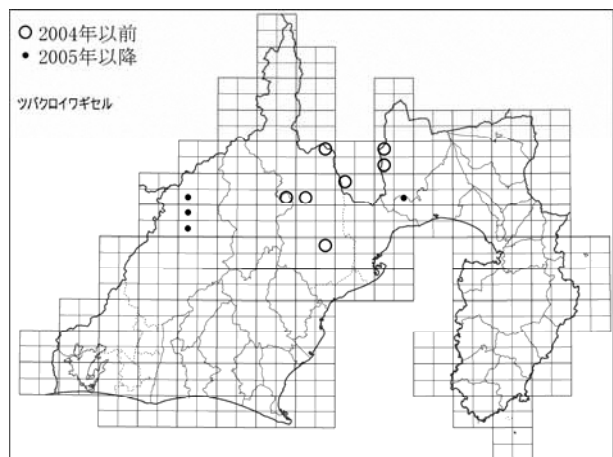
Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

## 9. 標本

浜松市産ほか：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 T.Kato  
浜松市天竜区産 2016年4月16日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

## マイマイ属の一種 *Euhadra* sp.

(=2004年版のクロイワマイマイ)

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU)(要件-①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

山地に生息する大型の陸貝。静岡県レッドデータブック(2004)ではクロイワマイマイとされていた種であるが、生殖器の構造などから別の未記載種と考えられるようになった。殻高は23 mm、殻径43 mm程度で、殻は濃い褐色を呈し、1234型の色帯がある。色帯は第1帯と第3帯は色が薄く、第2帯は細い。粗い成長脈があり、それに沿った不規則な黄色い模様が見られる。螺塔は低く周縁は丸い。臍孔は広く開く。軟体は黒褐色で雲状模様がある。

### 2. 分布

日本固有種で、静岡と愛知、長野の3県の県境周辺に分布し、県内では浜松市の標高1,000 mを超える山地にのみ分布する。

### 3. 生息環境

温帯の広葉樹林に生息する。ブナやオオイタヤメイゲツなどを主とする天然林の林床に生息する。

### 4. 生息状況

良好な自然環境が残った広葉樹林にのみ生息するが、個体数は少なく、近年では生貝を見ることはきわめて困難である。

### 5. 減少の主要因と脅威

天然林の伐採(11)による生息環境の悪化が減少の主要因である。浜松市天竜区水窪町の産地ではかつて広大な広葉樹林が広がっていたが、1990年代までにはほとんどヒノキとカラマツの植林地となっており、現在では尾根筋にわずかに生息が確認される広葉樹林が残されているにすぎない。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

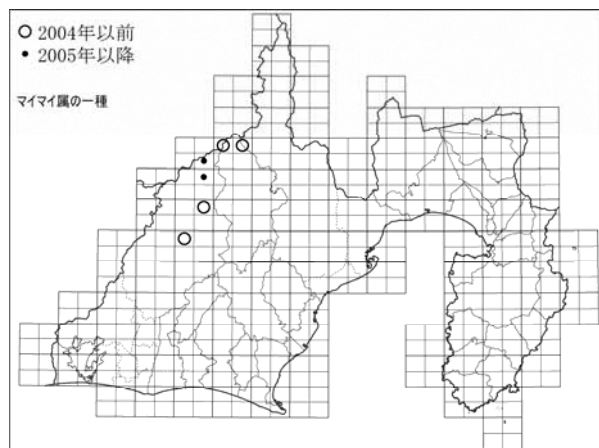
増田 修・波部忠重(1989) 静岡県陸淡水産貝類相. 東海大学自然史博物館研究報告, 3: 1-82, Color pls., I-III, pls., I-XIV.

### 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市天竜区産 1988年8月6日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# メルレンドルフマイマイ

*Satsuma moellendorffiana moellendorffiana* (Pilsbry & Hirase, 1903)

ナンバンマイマイ科 Camaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-①) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

中型の陸貝。殻高 20 mm、殻径 27 mm 程度が標準だが、海岸近くの個体は殻高 17 mm、殻径 22 mm 程度と小型である。周縁が丸い円錐形をしている。殻は赤褐色で周縁に細い褐色の帯がある。臍孔は広く開く。亜種のみノブマイマイは螺塔が低く、殻径がやや大きい。

## 2. 分布

日本固有種で、伊豆半島の特産亜種。伊豆半島では付け根付近から先端近くの河津町や松崎町まで広く分布する。なお、亜種のみノブマイマイとは分布が重ならない。

## 3. 生息環境

広葉樹林下に生息する。主に山地の森林に生息するが、時に海岸近くの林にも生息する。タブ、アカガシ、スダジイなどの比較的良好に自然が残った林で見つかることが多い。

## 4. 生息状況

各生息地とも個体数は少ない。近年は生貝を得ることはきわめて難しい。

## 5. 減少の主要因と脅威

伊豆半島は県内の他地域より広葉樹林の面積割合が多い。しかし、首都圏からの距離と風光明媚な立地条件から各種の観光開発が進み(23)、自然環境の悪化が顕著である。

## 6. 保護対策

生息地の一部は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、保護対策は講じられていない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

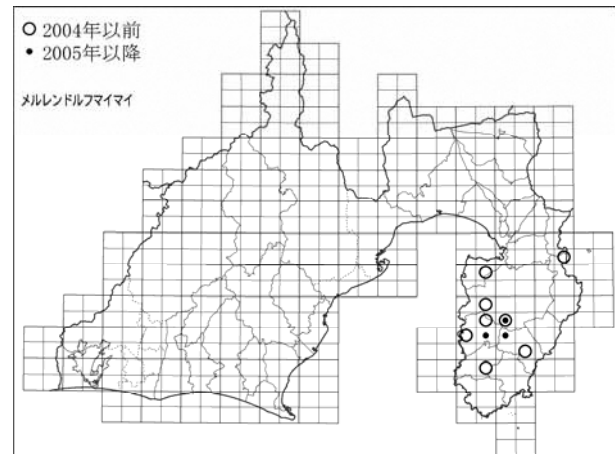
滝沢達夫・反田栄一(1981)メルレンドルフマイマイとミノブマイマイの生殖器の比較. ちりぼたん, 12(1): 4-8

## 9. 標本

西伊豆町産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



西伊豆町産 2007年7月26日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ミノブマイマイ *Satsuma moellendorffiana thaanumi* (Pilsbry, 1924)

ナンバンマイマイ科 Camaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-①) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する中型の陸貝。殻高 20 mm、殻径 30 mm 程度。螺塔は低く、周縁は丸く細い褐色の色帯がある。臍孔は広く開く。軟体部は黒褐色で頸部と眼触角は非常に長い。基準亜種のメルレンドルフマイマイより螺塔が低く殻径がやや大きい。

## 2. 分布

日本固有亜種で、神奈川県西部から山梨県南部、静岡県中部にかけて分布する。県内では富士山周辺から大井川水系までの山地に分布する。富士山周辺や安倍川水系にはいくつかの産地があるが、大井川水系ではきわめて稀である。

## 3. 生息環境

山地の自然度の高い広葉樹林に生息する。標高 800 m 程度より低い暖帯に生息地が多い。

## 4. 生息状況

産地は少なくないが各産地とも個体数は少ない。近年は生貝を得ることはきわめて難しい。

## 5. 減少の主要因と脅威

広葉樹林は人工林化 (71) や道路 (24) などにより分断され、孤立化したために、移動能力の低い本種をはじめとした広葉樹林に生息する陸貝にとっては、遺伝的多様性の低下も懸念される。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

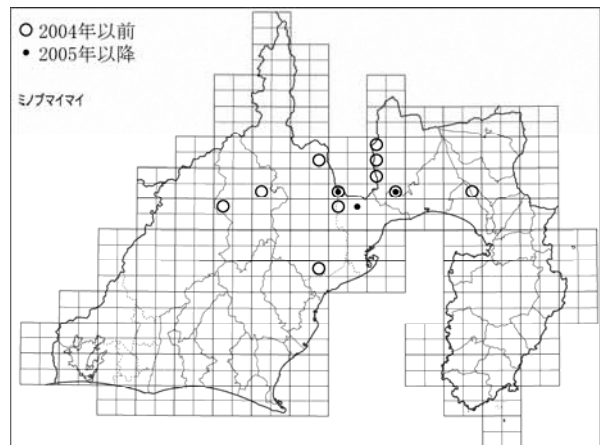
滝沢達夫・反田栄一 (1980) ミノブマイマイの新産地と分布および生殖器について. ちりぼたん, 11(1): 9-11

## 9. 標本

静岡市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



静岡市葵区産 1996年10月31日 加藤 徹採集



(加藤 徹)